041207　M1 学識者インタビュー・松村秀一先生　at 東大松村研究室
インタビュアー:中村　政人　アシスタント:福田　啓作

中村（以下、N）:まず、大野勝彦氏の「建築家像」、言い換えれば建築家としての特徴にいて伺いたいと思います。
松村先生（以下、M）もともと東京大学工学部は、官庁系、つまり国の公共施設、霞ヶ関とか東京駅とか日本銀行に代表されるような、官の系譜の建築家や、あるいはエンジニアを育てるという役割があった訳ですね。ですから住宅などというのは正面立ってテーマにするということが少なかった。それが、戦後に入って、公共の集合住宅、例えば公営住宅とか公団住宅に関わる研究者や建築家が増えるようになってきたんですが、その中で大野さんはあくまでも個人の住宅と町、ということをテーマにするとおっしゃってきた。それはなぜかというと、例えばオフィスビル等は典型的ですが、使う人ではないビルオーナー、、直接工事をする訳ではないゼネコンとの間に入って仕事をするのは嫌だ、ということなんですね。社会的にも、そういうものはどうなのかという意識が大野さんにはあって、もっと住む人と直接話しながら仕事をするとか、あるいは職人に近いところで仕事をするというポジションを選んでいったことが 1 つ特徴的だと思います。もう 1 つ決定的なのは、そういう立場をとっている「住宅作家」という人たちがいるのですが、住宅作家の人たちは、どちらかというと豊かな階層を対象に、言い換えれば余裕のある注文主に対応して住宅を作っていくという姿勢が基本にあるので、そうでない形をとりたいと大野さんは恐らく考えられて、つまるところ個々の住宅を設計していくのではなくて、産業的な、言わばグランドデザインといった所に自らを位置付けていく。新しく出てくる住宅産業といったような所にコミットしていく態度をとられたのが特徴的ですね。昔、よく大野さんがおっしゃっていたのは、雑誌に自分の作品を載せるような作家というのはダメなんじゃないか、と（笑)。つまり、そういうことが仕事の最終成果のように思っている人が多いのですが、これは大野さんが言われたのではなく僕が感じていることですが、そういうアウトプットは建築家としては志が低い、と（笑)。そうじゃなくて、社会の中で実際に動いていくものを作っていく。例えば、雑誌に紹介されるようなものにも成りにくいし、雑誌に紹介されたからといって喜ぶようなことでもないんだ、と。それから、大野さんがもう 1 つ特徴的なのは、ちょうど大野さんが東京大学に入った頃に、東大の建築学科から都市計画分野が出ていって都市工学科を作ったんですね。丹下健三先生とか高山英華先生とか、建築の中で都市的なスケールでものを考えていた人たちが、土木の人たちと一緒になって、都市の問題を扱う部門ができていく訳です。ところが大野さんの場合は、都市というよりも町と言い続けている。個々の建物ではなくて、全体でどういう居住環境ができていくか、ということに関心があったんでしょうね。だけれども、行政的に、マクロなレベルで都市計画を作っていくというスタイルは、どうも違うのではないか。建築家的な、個々の建築をやるサイドから、町づくりにアプローチする方法があるのではないか、ということですね。1970

年前後のセキスイハイム M1 を開発した頃から、個別の、例えば佐藤さんや田中さんの家をどう作っていくかという問題よりも、ユニットを使ってどのように町を構成していけるか、とか、町の構成の 1 つの道具として、どうすれば箱が機能していけるか、ということを非常に強く考えておられて、僕らが若い頃によく言われたのが、「これはゲリラ戦みたいなものなんだ」と。つまり、町を上からトップダウンで作っていくのではなくて、個別の住宅を点として展開していきながら、全体として町を作っていくことに寄与していく態度が重要である、というようなことをおっしゃっていましたね。ですから色々な意味で、非常に特殊な、全く同じようなタイプの人のいない建築家ではないか、と思いますね。

N：大野さんがハイムの開発に携わられたのが、まだ大学院の学生の・・・。

M：修士の頃と聞いていますね。

N：博士の論文がそのままある企業の理念になっている、といいますか・・・。

M：そうなんですよね。確か、博士論文の発表会の時に、ある教授から質問が出て、大野さんは「出来ちゃってますから」と答えた、と聞いたことがありますね（笑）。

N: ということは、論文がいわば単なる学説ではなく、既にその考えは世の中で出来ている、ということですか？

M：そうですね。僕らは研究だけをやっている研究者ですが、大野さんの場合は、あくまでも理論に基づいて実践していく。そして、なぜ理論が重要かと言いますと、大野さんがやろうとしていた住宅作りは、産業化ということと密接な関係を持っていたので、個々の注文住宅を住宅作家としてやる場合は、そういう理論は必要ないわけですが、産業の大きな動きとして展開していく上では、そういう理論が必要で、その理論に基づいて、ものは併行して作っていっていた、ということですね。ですから博士論文とハイム M1 というのは、恐らく併行して動いていたものでしょうね。

N：大野さんが若い時から現在まで、M1 開発以後の活動の中では、どのようなスタンスだったのでしょうか？

M：スタンスにあまりブレはなくて、一貫して住宅=町づくりを標榜して活動されてきた。ハイム M1 をやられて 10 年位経ってからは、木造住宅の部品化というのを盛んにやられて、地域毎に職人社会も違うし、使える材料であるとか、あるいは元々持っている住宅の型であるとか、町の歴史も全て違うので、それを展開していく上で、もう少し職人寄りの住宅=町づくりの方法として、木造住宅の部品化ということに、その後長く関わってこられたんだと思います。また、それが割と誤解されやすくて、ある時代には工業化をやっていて、後からノスタルジックに木造をやっているのではないか、という理解のされ方もあります。木造で町づくりということになりますと、同時代に色々な動きが出てくるんですね。色々な建築家が関わって、その地域らしい木造住宅の開発というようなことをやる訳ですけれども、大野さんの場合は一貫して理論的なんですね。産業全体はこういう構造だから、ここの木造はこういう風に作る。そこにたまたま地域という与条件が入ってくる訳ですが、理屈としては、ハイム M1 と同じような、町を作る道具立てというスタイルでやってらし

たんだと思いますね。僕らは非常に近い所で薫陶を受けてきたので、大野さんの活動が一貫しているということが非常に良くわかるんですが、他の人から見ると、随分変わった、という捉え方をされる方がいらっしゃるかもしれないですね。
N：今のお話しの続きで、「道具化の構想=職能」と言いますか、「無目的な箱」というのも1つの構想ですよね。個人的には、大野さんの「無目的性」という構想に、アーティストとして非常に惹かれているのですが、大野さんの理論化のプロセスの中で「道具」ということ、あるいはハイムの持つ「無目的性」について、もう少し詳しくお聞かせ頂ければと思います。
M:それは非常に先端的と言いますか、時代と合っていなかった気もするんですが、つまり、大野さんが学生として、あるいは建築家としてスタートを切る前に、メタボリズムという運動があった訳ですね。黒川紀章さんや菊竹清訓さんのように、いわゆるメタボリストと呼ばれる、ちょうど大野さんより一回りくらい年齢が上の方たちですけれども、箱で言うと、「カプセル概念」というのがあったんですね。そして、そのカプセルは、色々な機能を詰め込んだカプセルで、大阪万博の頃にはビジュアルにはそういうものが出尽くした形になっていた。ちょうど万博の頃というのは、大野さんがハイム M1 を設計していた時期だと思うんですね。メタボリズムのカプセル概念に対する違和感というのが、恐らく大野さんにはあったと思うんですね。そうではなくて、箱というのは空間を作っていく原理なんだ、ということを大野さんはよくおっしゃっていましたが、例えば、コルビジェが1914年頃に描いたドミノ・システムという、床が2枚あって、柱が6本ついているだけの絵があるんですね。その考え方に非常に似ている。最終的には、どうも床を作るための道具なのではないか、というのが僕の考えですね。つまり、箱にして、底面はもちろん床なのですが、上に床か屋根を持ってこないと建築的な空間にならないですから、上面を簡単に宙に浮かせるための道具。それはたまたま柱が 4 本ついて、地面から平面を持ち上げている訳ですね。それが屋根になったり床になったりする訳ですけれども、そういう感覚のものかな、と思って、大野さんの前で喋ってみたこともあります。大野さんは、特にそうであるともそうでないともおっしゃっていませんでしたけどね（笑）。あと、大野さんが非常に面白いのが、箱について最初にどのように考えていたかについて、割と最近聞いたのですが、足したり引いたり持ち運んだりできる、という単位として元々考えていたと。ですから、男と女が結婚する時に、それぞれハイムに住んでいるとすると、箱を持って結婚して（笑）、箱を持ってドッキングして、箱が2つや3つになるイメージ、あるいは、隠居する時に箱が離れる、とかいうイメージをおっしゃっていましたね（笑）。正に、箱自体は機能や用途等のある種の目的を持っている訳ではなくて、正に「無目的な箱」である訳で、それに色々な人が色々なものをくっつければいい、と。ですから、大野さんの構想ではハイム M1 というのは 1 つのタイプでしかなくて、柱・梁で構成された箱に何をくっつけるか、ということに関しては、工程上も全く別になっていて、箱だけを作る工場があって、それに外壁や設備をつける工程は、別の工場があったり、あるいは地元の工務店がやってもいいとい

うような、かなりオープンな生産体制を究極の姿としてはイメージしていたんです。ただ、実際には、1 つの工場の中で全てを生産した上で、それを現場に運びこむという 1 つの企業の体制として実現されたということだと思います。
N : 私の研究室でも 14 ユニット購入して、学生に 1 つずつ与えているんですが、新入生に 1 箱ずつ与えて、これで好きにしなさい、というような（笑）。
M : それは、大野さんが最も望んでいた使い方ではないですかね（笑）。
N : 私の場合は、M1 には良い意味での精神的な揺れといいますか、原理のようなものが内在していて、原理であるが故に、ある種本能的な部分と結びついている感じがするんですね。ある種のクリエイティビティーがある人は、M1 を見るとぞくぞくすると言いますか、喚起させられるものがある。それは大野さんがおっしゃった意味で、原理的なものを内在している気がするんですよね。
M : 元々は住宅という訳でもないんですよね。単に箱で、箱が集まって住宅になることもあるし、アトリエや事務所になることもあると大野さんは考えていたんでしょうね。大野さんが好きなハイム M1 の使い方で､今は町づくり等の分野で活躍されている林泰義さんと、象設計集団の富田玲子さんご夫婦が 21 ユニットを購入して、使われているんですが、あれが正解であると大野さんはおっしゃっていました。箱を勝手に連結して、自分で考えてもらえばいいと。しかし、積水化学さんなんかが市場で相手にしている、実際の日本の住み手には、そんな時間も想像力も手段も無いので、結局全てつけて、商品として売る、という形になっていますけどね。可能性としては、色々とあったんですね。
N:工業化住宅の歴史的な系譜の中での､M1 の位置付けについてお聞きしたいと思います。
M : かなり特殊な位置付けであると思います。似たようなものとして、アメリカのモービルホームがあります。 1 96 7 年頃、アメリカのモービル・ホームを使った住宅産業の存在が日本で注目されました。それが日本で住宅産業が語られるようになる背景の 1 つとしてあるんですね。モービル・ホームというのは、住宅 1 つを作りこんで、車で持ってきて設置するとか、あるいは 2 個割りにして持ってきて 1 個にするということなのですが、それらは住宅という概念が先にあって、それをいくつかの箱に分けるという考え方なんですね。ところが、大野さんと積水化学がやったセキスイハイムの最も特徴的な点は、先程言いましたように構造となる「無目的」な箱と、それにとりつけるサブシステムという考え方でできているんですね。2 段階になっていて、サブシステムというのは大野さんがおっしゃる所の「部品化」というもので、建築の部位を構成するものが色々な部品になっていく。部品がとりつく原理、といいますか箱が別にあるという考え方で出来ているものですから、随分明快に部分に分かれていて、それぞれ部品化されていく形で出来上がっている工業化住宅なんです。そういう意味では、モービルホームとはかなり異なりますし、工業化住宅の歴史の中では割と特殊なものですね。普通の発想では作りたいものが先にあって、それをどのようにして部品にばらしていくか、という考え方で作られているんですね。工場でばらして、現場でまとめあげると 1 つの住宅になるという考え方ですが、大野さんはそれ

とはちょっと違っていて、結果としては同じような住宅になるのですが、部品は部品として既に存在していて、無いものは自分たちで開発すればいい、と。そして、どの部品をこの箱につけるか、ということに関してはかなり自由で、かなりオープンなものであるという発想が元々存在し、その発想に基づいて M1 は作られていますから、そういう意味では考え方として、プレハブ住宅の中では少し変わっているものだと思いますね。非常に考え方が理論的だ思います。市場の中での成功・不成功との関わりで言うと、どちらがいいかはわからないですけどね。

N : M1 が市場に出てきてから、70 年以降に発展していきますよね。その後の流れというのは、どのようなものだったのでしょうか。

M : ハイム M1 自体は、基本的な原理が独特なものなのですが、段々売れてきて、1970 年代後半に入ると住宅メーカーの中でも大手 5 社の中に入る位置付けになって、そうなると他の住宅メーカーがやっている商品化と競合していく形になっていく訳ですね。立ち上がりの時は、非常に特殊な位置付けのもので、特殊な客層に受け入れられて、他に比べるものがなかったのが、ある量を実現していく中で、自分たちも他の住宅メーカーの様子を見ながら商品化していかないと、大きな市場シェアを獲得できないということで変わっていきます。原理は変わっていないんだけれども、商品化という意味で他のものと非常に似た表現になってきて、元々あった箱的な表現ではなくなってきて、一体の住宅としてデザインされたものが箱に分割される、という形になってきます。そういう経緯で、発売当初とはかなり違うものになってきたんだろう、という気はしますね。

N : 住宅産業として、30 年の変化やその後の流れとしては、どういう方向に向かっていったのでしょうか？

M : 初めは、1970 年頃の、ハイム以外のプレハブ住宅のほとんどのものが、中の工事等は現場の工務店任せだった訳ですね。基本的に、外壁パネル等は自分の工場で作って、商品に名前がついていたりするんですが、カチッとした商品や製品として流れていた訳ではなかった部分があるんですね。それが、昭和 50 年代に入ると、付加価値を付けていく。現場の工務店任せにしているような体制では、いい加減なのではないか、と。台風で屋根が飛んだりして、昭和 40 年代の終わり頃に、「欠陥プレハブ問題」というのが国会で議論された時代があるんですね。昭和 40 年代の終わり頃には、A 社が作る限りは、全ての工程に A 社の目が行き届くようにという社会的な要請もありました。それまでは工務店とプレハブ住宅メーカーが、ずるずるっと組んでやっていた。例えば、カタログにプランなんかが載っていても、現場では全然違うものが出来てしまっているということが、頻繁にあったみたいなのですが、それが段々無くなってきて、昭和 50 年代に入ると、住宅メーカーが集約してコントロールしていく形が出来上がり、尚且工務店による一般の住宅と違うものということになると、提案型になってくるんですね。それまではハード面での提案だったのが、住まい方等のソフト面での提案も含むようになってきて、ややファッション的になっていく。と言いますか、中の間取りや外観イメージ等、あらゆるものに商品的なイメージを付

加して、差別化をしていくというスタイルに入ってくるんですね。ハイムもその流れに乗らざるをえなくて、パルフェやアバンテ等の名前をつけて商品を作っていくんですね。そうしていくと、結局どんどん名前のついた商品を開発してしまう。初期の商品は、それを見るとパッとわかるような、非常に完結していて識別性の高いデザインで、中のプランまで分かってしまうというようなパッケージだったのですが、商品化を押し進めて商品の数が増えていくと、識別性が無くなってくる訳ですね。自分の会社が売っているものすらも、何がどうなっているのかわからない。ましてや一般の人になると、何のことだか全然わからない。そうなって、結局商品化という、パッケージして識別性の高いものを作っていくということは行き詰まってしまって、バブル期以降は、そういったはっきりしたイメージのものは出ていないですね。ある種の生活のぼやっとしたイメージだけがあって、あとは個別に対応していくということになってきたので、今は木造住宅と同じ感じになっていると考えていいのではないでしょうか。ですから、これからどのようにやっていくかということは、非常に難しいところで、ソフトな営業力が強い所は、営業の力が強くて、個々のお客さんに徹底的に満足してもらえるようにコンサルティングしていきます、という風になってくる。そうすると、それはもう商品の力ではなくて、人材・組織の力になってくる訳ですね。一方で、メーカー体質の強い企業は、恐らくシェルターとしての性能のようなところに特化していかざるをえなくなる。つまりハードなテクノロジーのようなものをまとって、木造住宅にはこれはできないでしょう、という性能・ハード面に特化していく方向の 2 つに分かれていきつつあるという気がしますけどね。これからは、プレハブだからということも無くて、木造の世界も全部あわせて、それぞれの道を、あるいはそれぞれの会社独自の道を切り拓くしかない、という感じになっていくのではないでしょうか。ハイムは、そういう意味では原点回帰しつつあるのではないかと思いますけどね。今、M1 保存プロジェクトのような動きがあるのも、元々我々は何だったのだろうかということですよね。リユースというようなこともやり始めていますが、あれは、解体したら箱をそのまま持ってきて、違う部品をつけて出せばまだ使えるじゃないか、という、箱が持っていた可能性を引出す試みですよね。どのメーカーも、他のメーカーにない元々の素性と言いますか、元々の能力は何なんだろう、と再考しているということですね。

N：今おっしゃったような、再築システム等は色々な可能性があるのではないか、と思うのですが、今回、Docomomo100 選に認定されたということで、ある意味個性を消していくような作業の結果である、プレハブ、あるいは量産住宅としてのオリジナリティーが認められたということだと思います。そうするとある歴史的価値がつき、例えば、自動車部品のパーツを収集する人たちがいるように、M1 も今までの価値ではない、ある種の骨董価値のような新しい価値が始まっているような気がするのですが。

M：昔の 007 が乗っていた、アストン・マーチンのようなものでしょうか（笑）。

N：(笑)。そういった意味で、M１の持っている可能性について、どのように考えられるでしょうか。

M : 先程、「無目的な箱」というのは時代が早すぎたのではないかと言いましたが、正に今、そういう時代になってきていると思います。今までの社会というのは郊外の庭つきの住宅に住んで、子供を育てて、お父さんは 1 時間位かけてオフィスに行って、そういう風に切り分けられた人間の生活時間に対応する施設を用意していくということが、建築の仕事であったし、恐らく多くの人も、そういう生活を送っていた。だから住宅が欲しいとか、超高層のオフィスがいいと言っていたのですが、恐らく随分変わってきている。例えば、図書館で本を読んで勉強するということがあって、そのために図書館をたくさん作っている訳です。あるいは、美術館をバンバン作っている、しかし、本当に図書館で勉強しているのかというと、図書館では違うことをしていて、本を読むのは、コンビニで雑誌を読んでいるとかね (笑)。計画的に意図して作った機能単位の建物が町を構成するというあり方と、人々の生活がずれてしまっている訳ですね。この間、僕の同級生である、建築家の青木淳が『原っぱと遊園地』という本を出して、冒頭の部分に美術館の話が出てくるんですね。ある時期に、たまたま横浜周辺の廃校を利用して、アーティストが色々やっている展覧会を見に行って、その後、丹下健三先生が設計された MM21 の美術館に行ってみた。すると、明らかに後者は駄目だと（笑)。特定の目的に沿って作られたものというのは、あくまでもその目的のためであって、展示されている作品自体も死んでしまっているし、お互いに駄目になっている、と。ところが、廃校みたいな、何かよくわからないものとアーティストが一体となってやっているものは、非常に魅力を放っていると。後者が原っぱで、前者が遊園地ですね。要するに、遊園地のようなものは一時的には面白いかもしれないが、時代的にはそういうもので飽和してしまったから、ドラえもんやオバ Q になぜか出てくる、あの原っぱや土管のようなものを、今の時代は求めているのではないだろうか、というようなことを書いていました。僕と青木淳なんかは、全く違う方向・分野に進んでいるので、本来であれば共有できない部分があって然るべきなのですが、その考え方に関しては完全に波長が合う訳ですね。恐らく多くの人がそういう感じになっていると思うんですよ。そうすると、ハイム M1 のような「無目的な箱」で、中で何をするかというのは色々あり得るし、「無目的な箱」という所に非常に可能性があるような気がします。M1 が元々持っている、一番大事な所はそこですから。他の住宅メーカーが、住宅を作るために部品を作ってきたのとはかなり素性が違うものですから、その可能性は何か生かせないかな、と思います。

N : では最後に、松村先生にとって、一言で M1 とは？

M : 原理（笑)。Docomomo の選定委員の方が、どのような議論で M1 を選んだのかはわからないですが、M1 が他のプレハブ住宅と決定的に違うのは、作っているものに原理がある。それは大野さんが博士論文と併行して作っていた、ということが象徴的なのですが、何か理論的なんですね。建築はこうあるべきだ、とかこれからこうなるよ、ということを見せた。量で言えば、積水ハウス B 型というのが圧倒的な量なのですが、M1 の場合は、それが単に多くの人々の住宅になったから、ということではなく、建築的な原理、大野さんと積

水化学が一緒になって作った原理が選ばれているのだろうと思います。
N：今日はどうもありがとうございました。